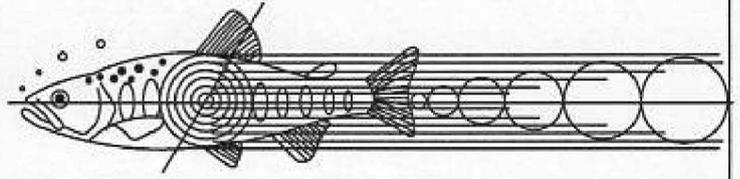


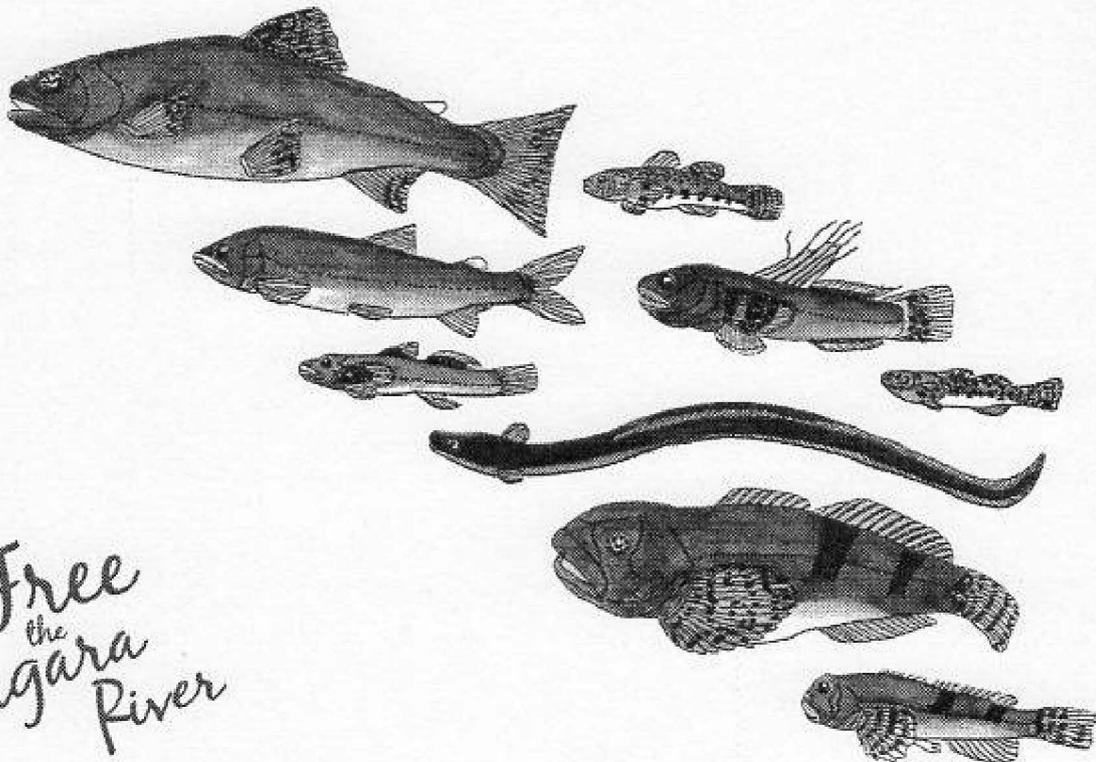
news

長良川市民学習会ニュース



よみがえれ 長良川

河口堰20年・開門調査実現を！



Free
the
Nagara
River

No.20

2015年6月1日

表紙 (後藤宮子・高橋由実)	P1	岐阜県魚苗センター見学会報告	P12
長良川河口堰運用20年を迎えて	P2	ご参加ください！7/4-5「よみがえれ長良川」	P14
活動報告	P2	訃報・表紙の絵	P15
シンポジウム「長良川のアユ」報告	P4	校歌に歌われた長良川特別編②・今後の予定	P16

長良川を放射能で汚してはならない！私たちは、原発の再稼働に反対します。

長良川河口堰運用 20 年を迎えて

長良川市民学習会代表 粕谷志郎

1995 年、出来上がった河口堰を運用するにあたって円卓会議なるものが行われ、建設省と環境に懸念を抱く長良川下流域生物相調査団を中心とするメンバーで、議論が行われました。この段階で、河口堰下流にヘドロが貯まり、ヤマトシジミが消滅することは建設省のデータから読み取れていました。アユの遡上・降下の妨げになることも当然ながら予想されていました。これらは補償金で決着済ということですが、ほどなくして、村山内閣の建設大臣、社会党の野坂浩賢氏が河口堰運用を決定しました。予測のほとんどはその通りになりました。その後、政治は大きく変わり、鳩山内閣、菅内閣ができました。しかし、河口堰はびくともしませんでした。この 2 人は河口堰のゲートを開けることを強く宣言していたにもかかわらずです。

ゲートが動かないことは、必ずしも無力と言えないように思います。矢作川、吉野川の河口堰建設は断念され、その後の河口堰建設の予定はありません。長良川河口堰が最後の河口堰であり続ける意義はとても大きなものがあります。長良川河口堰の 20 年は動かないバランスを支えてきた力です。さもないければ、川という川に河口堰が造られ、環境が破壊され続けたに違いありません。長良川河口堰のゲートを全開し、失われた環境が戻れば、名実共に世界遺産たる誇れる川になることは間違いありません。

活動報告

長良川市民学習会事務局長 武藤 仁

1 月からの長良川をめぐる状況と長良川市民学習会の活動報告をします。

今年は河口堰運用 20 年の年。長良川をよみがえらせるために、河口堰開門に向けた「開門調査実現！」の世論を高めようと年明け早々 1 月 12 日に市民シンポジウム「長良川のアユ」を開催しました。釣り人にも有名な白滝さんの登壇とあって多くのアユ釣りファンが詰めかけました。また、岐阜市の「アユの準絶滅危惧種」検討の話題が関心を高める中、魚類研究者の向井さんの登壇も注目され環境保全を期待する市民も多く参加しました。活動の立場が違う両講師の議論はとても興味深く、参加した 150 名の市民は熱心に聞き入りました。内容は、本 news P 4～シンポジウム「長良川のアユ」報告をご覧ください。

長良川河口堰の検証をめぐることは、愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会が国に対し対話を始めるために質問書を 1 月 6 日に出しました。5 月 25 日に回答はありましたが、合同会議設置については後ろ向きで開催の目途はたっていません。<http://www.pref.aichi.jp/0000083311.html>

岐阜県では長良川河口堰調査検討会が毎年秋に県民調査団による現地調査があり年度末に検討会が開催されています。当会は有志で調査団に応募し参加するとともに、岐阜県に対し検討会を「河口堰事業を検証する組織」とするよう求めてきましたが拒否されています。今年度の検討会は 2 月 9 日に開催されました。国の「更なる弾力的運用」*（以下「運用」）の実施以来この評価をめぐる議論が多くされています。説明者として事業者側も出席していますがこの「運用」による生物生息を指標にした改善データの提示はできていません。

*上流側に海水を入れないことを条件に、環境改善を目的にゲート操作（アンダーフロー、オーバーフロー）を増やす。

また従来から漁協関係者からアユの降下期間は「運用」を続けてほしいとの強い要望がありましたが「ノリ漁に悪影響を及ぼす」との理由で10月以降の「運用」はできないとしてきました。しかし報告では「(平成25年度)10月から12月にかけて5回実施したことを確認」し今年度も実施したとしています。開門ができない理由にしたノリ漁被害論を自ら崩したことになるのではないのでしょうか。

河口堰のゲートを開けてほしいという声が高まる一方で実体の見えない「ノリの被害」、「塩害の恐れ」が開門を妨げになっていますが、こうした「恐れ」は開門調査によって解消できると思います。

堰運用20年のこの年こそ、開門調査実現の年になるよう願います。そんな思いから、当会代表らが3月9日「よみがえれ長良川～河口堰20年・開門調査実現！」を流域の市民団体などに呼びかけ、4月9日実行委員会が発足しました（本news P14をご覧ください）。

3月14日、当会主催で「ダムネーション」上映会を開催しました。ダム撤去が当たり前になったアメリカのドキュメント映画で70名もの大勢の市民が熱心に鑑賞しました。

7月5日のシンポジウム「河口堰の開門調査実現を！」では、日本で初めてのダム撤去（熊本県荒瀬ダム）で球磨川と海がどうよみがえったのか、現場からの報告があります。ご期待ください。



河口堰建設反対を訴えて長良川をカヌーで下り、自転車でも宣伝する「市民の会」の人たち＝岐阜市内、津田正夫さん提供

長良川河口堰

反対運動 着工前の軌跡

長良川河口堰（三重県桑名市）の運用開始から20年となる7月、1960～80年代の建設反対運動を記録した写真などが岐阜市で展示される。ねじり鉢巻きの漁民の集会、大漁旗を掲げた船上デモ、河群コンサート、公害などで環境への関心が地元で高まり、河口堰問題が熱く議論されていた時代を伝える。

岐阜市で7月 写真や機関誌展示へ

7月5日に岐阜市の長良川国際会議場で、河口堰が環境に与える影響について開門調査などを求める市民らが全国集会を開催。そこが、50年近い反対運動の資料展示の場となる。反対運動は88年の着工時に作家の故関高健らが加わり全国に広がったが、着工前の記録も公開されるのは珍しい。岐阜市では74年に「長良川河口せき」に反対する市民の会が生まれ、機関誌「川吹え」を13年発行。当時の写真や機関誌は、大学講師の津田正夫さん（71）とフリージャーナリストの高橋恒美さん（74）が提供する。河口堰を含む木曾川水系の水資源開発計画が閣議決定された68年、津田さんはNHK岐阜放送局ディレクター、高橋さんは岐阜新聞記者として岐阜市にいた。ともに労組役員で反対運動に関わり、「市民の会」結成や「川吹え」発行の中心になった。水俣病や四日市公害が当時問題化していたことから、開発から地域の自然や暮らしを守ることに関心を強めていた。津田さんは転勤を断り、87年まで岐阜、名古屋両放送局に約20年間在籍。河口堰に絡む番組も多く作った。ただ、報道にあたり自身の河口堰反対運動と二線を画す必要があった。高橋さん



河口堰建設反対を訴える漁師らの集会（1974年）＝岐阜市内、津田正夫さん提供

津田さんは編集者だった当時、参加した活動の写真を別の記者から出稿され、「できごと」としてと振り返る。漁民ら2万6千人による75年の建設差し止め訴訟提起、76年の長良川堤防決壊を経て、岐阜県庁に機動隊が動員される中で78年の知事の建設同意、81年の差し止め訴訟取り下げ……地元で揺れ動いた河口堰問題を、見つめ続けた。7月に全国集会を開く「よみがえれ長良川実行委員会」の事務局長で、元名古屋市長の武蔵正太郎（66）は「僕らもかつての運動をよく知らない。漁民や輪中の人たちが真っ先に反対し、それがどうなったか。考える契機にしてほしい」。展示資料を保管してネットで公開するなど市民の共有財産にできないか、2人と話し合っている。（編集委員・伊藤智恵）

2015.5/10 朝日新聞

2015.4/10 岐阜新聞

長良川河口堰 開門調査求め実行委

岐阜、愛知の市民団体設立

長良川河口堰（三重県桑名市）を運用開始以後、長良川の本格運用設立した。節目の7月川の鮎の漁獲量は冷水開始から20年を迎えるに開門調査の実現を求め、開門調査のめぐるシンポジウムや削減。岐阜市版レッドリバーを準備。写真はがき知県などの市民団体が国や県への要請を強める一方、世界農業遺産の要請なども予定す9日「よみがえれ」していく。

岐阜市橋本町のハイアールスクエアA1Gで高まる中、開門調査実現をめぐり環境に関心があつた。



「よみがえれ長良川」実行委員会の発足会で計画案を説明する粕谷志郎共同代表（右から3番目）＝岐阜市橋本町、ハイアールスクエアA1G

現への機運を高めるのが狙い。7月4日に河口堰周辺の観察会や船上からの開門アヒールを行うほか、同5日に長良川国際会議場でシンポジウムや若手の討論会を開催。写真はがき知県などの市民団体が国や県への要請を強める一方、世界農業遺産の要請なども予定す9日「よみがえれ」していく。

2015/1/12 シンポジウム「長良川のアユ」 報告



新年幕開け、1月12日ハートフルスクエアGで市民シンポジウム「長良川のアユ」を開催しました。今年2015年は「河口堰運用20年」の年となります。堰開門の展望を開きたいという思いで企画しました。

「清流長良川の鮎」の世界農業遺産登録への期待と鮎の準絶滅危惧種指定で長良川に注目が集まっています。講師に郡上漁協の白滝参事と岐阜大学の向井先生を迎えて議論しました。関心は高く開会前から多くの市民が詰めかけ会場は満員。150名の参加となりました。

講演とシンポジウムの内容を講師の了解を得て紹介します。

(講演) 長良川上流のアユをはじめとする魚の状況と郡上漁協の取組み

白滝治郎さん(郡上漁協参事)



<郡上漁協で35年>

祖父、父は夏場にはアユ釣りばかりする家庭に育ち、自身も小学校に入った春、小さなアマゴを釣ってから釣りの世界にのめりこむようになった。好きな魚を勉強しようと近畿大学農学部水産学科へ進学。大学に残りマグロの研究でもしたかったが、長男でもあり父から帰郷するように言われ、郡上漁協へ就職。以来35年になる。

<長良川上流域の魚について>

郡上管内で自分自身で確認している魚類は在来種が25種。琵琶湖などからの放流魚と一緒に入ったと思われるものが5種の計30種。川の健康のバロメーターであるカジカや天然記念物のネコギギが増えてきている。中でも一番好きな魚はアユ。おいしくて釣りが楽しいだけでなく、春に海から遡上し、秋には産卵し海に下り、一生懸命生きて一年で一生を終えるアユの生き様が大好きで、魚はアユと思っている。

<天然遡上アユを増やす取組み>

早期遡上のアユが減少傾向にあるため、下流の長良川漁協を中心に漁業対策協議会で天然遡上アユを増やす取組みをしている。秋に採卵、受精させ棕櫚(しゅろ)につけ、発眼したものを河口堰傍の人工河川に運び、孵化させている。できるだけ早く採卵し孵化放流し、早く遡上するアユを増やしたい。

<サツキマスは>

河口堰反対運動の象徴とされたが幸い今でも上ってきている。秋に産卵し海に下り大きくなって翌春戻ってくる。毎年5~10匹位釣っている。折角郡上まで上って来たサツキマスはほとんど捕られてしまい産卵に至る親がない。自己満足かもしれないが、春に釣ったサツキマスを自宅の池で飼って、秋

になると産卵場になっている川に放っている。仲間も協力してくれ、少しでも天然を増やせないかと願ってやっている。

<郡上アユは>

全国的に脚光をあびるようになったのは大正年間。当時郡上は仏教が盛んで、魚捕りは良い目でみられなかった。そこへ伊豆半島の漁師が出稼ぎでやってきて、釣ったアユを東京の方に売っていた。その業を学び、地元の漁師たちも、大きさ、鮮度、品質を揃え売る共同出荷体制を編み出した。これで郡上アユは有名になり、高く売れるようにもなり、東京の赤坂などの有名な料理店でも使われるようになっている。平成19年に大間のマグロ、関アジなどと共に「地域団体商標」に登録され、平成20年には「利き鮎会」でグランプリを獲得し、地域ブランドとしての地位を確立してきた。ちなみに奥美濃の川の中でも南に流れる川のアユはおいしいと言われている。郡上アユをきちんと使ってくれる店に「認定店制度」を導入し、岐阜なら川原町の泉屋さんなどに直販することにより、販売量、販売価格も安定するようになった。

<世界農業遺産>

昨年(2014年)7月に、岐阜県知事、流域の市長、漁業、農業、林業、観光関係者が中心になり「農林水産業推進協議会」が設置され、「清流長良川の鮎」が「世界農業遺産」に登録されるよう運動してきた。シンポジウムでのプレゼンテーションや現地調査などに関わり忙しく、例年70日程していた釣りが30日しかできなかった。

世界農業遺産はUNESCOの世界遺産とは異なり、国際連合食料農業機構(FAO)によって創設されたもので、地域環境を生かした伝統的農法や、生物多様性、農村文化、農村景観が守れた土地利用などを「農業のシステム」として一体的に維持し、次世代に敬承していくことを目的としている。今回の登録は「清流長良川の鮎 ～里川における人と鮎のつながり～」として登録を目指している。長良川はいわゆる天然河川でも自然河川でもない。源流から河口部までびっしり人びとがはりついて、それぞれ恩恵を受けて生活しながら、アユを育てている素晴らしい里川だと思っている。今回の登録申請にはなぜ上流と中流域だけなのかと質問されるが、審査の人には僕は河口堰のこと、川と共に生きてきた下流域の輪中の農業のことも話している。結果としては岐阜県は上・中流域で申請することになったが…。

<日本一の郡上鮎を守るために一源流の森育成事業>

山の荒廃は川を荒廃させ河川工事がその荒廃を助長させている。なんとかしたいと思い、多くの人の協力を得ながら源流に広葉樹を植樹する活動を平成22年から始め、毎回2000本から4000本位植えている。しかしこの効果が現れるのは50年、60年先だろう。郡上漁協は職員3名の小さな組織で財政的にも余裕があるわけではない。この運動が他の組織にも広がることを期待している。

<冷水病フリーアユ種苗の単独放流>

琵琶湖産のアユを放流していたが、以前冷水病が蔓延して壊滅的な打撃をうけることがあった。そのため病気に強い海産の種苗放流をしてきた。始めは木曾川産が中心であったが、できるだけ長良川に合った長良川産の種苗放流を目指したいと県でも取り組んでおられる。県の水産研究所がアユの遡上予測を研究中なので、効果的な放流の実現を目指したい。生物多様性の見地からは、自然にできるだけ手を加えない方がいいのだろう。その点では学者の先生方とは考えが違うと思うが、産業としての漁業として一番良い方法をとっていくのが我々の考え方である。放流しなくて天然遡上だけでできればいいなあ、それを目指したいと思うが、夢のまた夢だろう。放流について付け加えれば、内水面漁協は漁業権

更新の時に知事から許可を得る為に、法律によって、「資源枯渇を避ける為に魚を捕るためには放流せよ」という放流義務を義務付けられている。

<カワウ、カワアイサの被害>

子供の頃にはいなかったカワウが増えその被害が広がってきた。少し減ってはいるが50、60羽と軍団でやってくる。猟友会に駆除を委託している。漁協職員も狩猟免許をとって被害を減らす努力をしている。また10年程前からシベリア方面からカワアイサがやってきて、一部留鳥化している。一日に500g～600gも魚を食べているようで被害額も莫大で頭を悩ませている。

<水上レジャーとの共存>

近年、長良川でラフティングなどの川遊びが盛んになってきている。一日に150艘位が川下りをしている。丁度アユ釣りと同じくらいトラブルが起こるようになった。ラフティング対策委員会を設置し、ラフティング業者にも組合をつくってもらい協定をかわしている。

<最後に>

長良川を上流に住む人から下流に住む人まで、それぞれが川に対して思いやりを持って、伝統を大切にして、今後も、本当に長く（永く）良い豊かな川であり続けるよう、向き合っていきたいと思っている。

(講演) 長良川のアユと生物多様性

向井貴彦さん (岐阜大学地域科学部)

生物多様性とは

生物多様性は、いくつかの段階に分けられている。一つは「生態系の多様性」であり、熱帯雨林や南極の環境など地球上のさまざまな生態系を守ろうというもの、日本について言えば海や山など色々な環境を守ろうというものである。次に、植物や動物など、できるだけ多くの生物種がいたほうが良いという「種の多様性」がある。さらに、植物や動物には「遺伝子の多様性」がある。遺伝子の多様性というと難しく聞こえるかもしれないが、それは個体ごとの「個性」ということ。人間をはじめ個性の違いは遺伝子の違いから生まれている。地域の環境の違いは、それぞれの地域の生物の遺伝子の違いであり、環境を守っていくためには、遺伝子の多様性を大切にする必要がある。同じ種類の生き物でも場所によって違っており、イワナでも棲む場所によって柄や形、味だって違う。それが面白いし大切。それが自然の価値である。場所によって違うということに価値がある。

釣りやレジャーで川に来る人にとって、どんな川が魅力的だろうか。生物多様性を意識しているかどうかは分からないが、川に集まる人の数とそこに棲む魚の種数には相関があることが知られている。その地方に昔からある文化、伝統を活かし、その地方の生物多様性を守ることが、地域再生や地域おこしになるのではないかと。どこに行っても同じでは面白くもないし魅力もない。自然はそれぞれの地域で違う



もの。それを活かしていくのが自然保護、環境保全の考え方である。開発、外来種、むやみな放流が生物多様性を損ない、色々な動植物が失われてきている。ホタルが減ったからカワニナを放流しよう、魚が減ったからコイを放流しよう、という類いの対策は根本的な対策にはならない。自然を守るためには、まず、今の状態をきちんと知ることから始めたい。

絶滅のおそれのある種のレッドリスト

レッドリストには、国際自然保護連合（IUCN）が作った世界版レッドリスト、環境省が作っている日本版レッドリスト、愛知、岐阜、三重などの都道府県版、さらに市町村版がある。今回のアユの準絶滅危惧種選定は岐阜市版である。こんなにいろいろなレッドリストを作ってどうするのか、意味があるのかという疑問があるかもしれない。しかし、世界や国の全体的な評価と各地域の現状は必ずしも一致しない。日本全体では絶滅のおそれがなくても、いくつかの県では絶滅しつつある場合もみられる。生物多様性を保全しようとするなら、今減りつつある場所からこれ以上減らないようにする必要がある。特に危機的な所で適切な対策をとって欲しい。地域の自然を守るためにはまず自分たちの住む地域の状況をきちんと知ることが大切である。

岐阜市版レッドリストの選定

岐阜市域を500m四方のメッシュに分割し、それぞれのメッシュにおける河川、水路、ため池、田んぼなどの魚類を採集して調査した。岐阜市全体ではメッシュ数は907になり、そのうち419メッシュで魚類の調査をおこなった。そうして明らかになった岐阜市の魚類の生息状況をもとに絶滅危惧種などを選定した。岐阜市で見られる魚類の中で、アユについては準絶滅危惧と判断した。「準絶滅危惧」とは、まだ絶滅のおそれはないが、生息環境が悪くなっており、このまま何もしないでいると絶滅危惧種になる可能性があるというものである。長良川では1990年代以降、漁獲量が激減しており、岐阜市内で産卵したアユの仔魚は海に辿り着く前にほとんどが死滅すると考えられている。漁協は岐阜市で採卵したものを河口堰まで運び孵化放流する努力をしている。人の手で個体群を維持し、漁業も維持しているという現実がある。放っておいても昔のような状況が保たれる状況ではなくなっていることは確かである。漁獲量のデータ以外に、漁師や市民の感覚としてもアユの減少は感じられているだろう。また、岐阜県では飛騨地方や木曾川・飛騨川流域は海からのアユの遡上が全くないため、県の半分以上の地域でアユは既に「野生絶滅」だといえる。長良川には河口堰があるけれど、一応アユは上ってきているため、岐阜市では準絶滅危惧で済んでいるとも言える。

長良川のアユは

天然アユが産卵して翌年戻ってくればいいのだが、河口堰によって下流域の流れが緩やかになっている。岐阜市で産卵孵化したアユは、昔は1週間程で海に達していたが、1999年の調査では12日以上かかっていると報告されている。生まれたばかりのアユの仔魚は淡水と海水という全く異なる環境に順応できるが、1週間真水で育ったアユを海水に入れると死んでしまうことが実験によって示されている。魚の塩分適応というのはそういうものであり、成長段階で適応能力が変化する。そのため、現状では長良川で孵化したアユは、たとえ海に達しても死んでいるのではないかという懸念もあり、漁協が人工受精させて堰まで車で運ぶ努力をしているのではないか。また、美濃市の長良川中央漁協と協力して三重大学の間野静雄さんが行った研究によれば、10月末頃に「夜網漁」で捕獲したアユ72匹のうち

ち、河口堰を越えて海から上って来た天然遡上が86%を占めていた。琵琶湖産のものは残っていない、人工種苗が9.7%、他は海産由来の放流ものが4%。6月、7月頃は放流アユが多いけれど、10月頃に落ちアユとなって産卵に向かうアユは大半が河口堰を越えて上って来た天然遡上のアユだということである。岐阜市で捕っているものも放流したものではなく、基本は天然遡上アユと考えていいのではと思う。

多様な生物の棲む清流長良川を

岐阜県が世界農業遺産登録を目指すために、アユの種苗センターを増設し、放流を増やし、漁獲量日本一を目指すというニュースがあった。世界農業遺産の理念は良いと思うが、そのためにたくさんアユを放流するということだと、長良川を規模の大きい釣り堀にするということになってしまわないだろうか。それが世界農業遺産の目指す理念なのかと疑問に思う。その川で生き続けてきたさまざまな魚が豊富に棲む清流であってほしいと思う。生物多様性と調和した伝統的農業や土地利用を保全するという世界農業遺産の理念を活かしていくことが課題ではないかと思っている。長良川に徳山ダムの水を流すという導水路計画も、長良川をもっとよくしたいという皆の望むものとは相容れないものだと思っている。

当日配布の資料はニュース19号、HP (<http://dousui.org/>) に掲載。

岐阜市自然環境基礎調査は(<http://www.city.gifu.lg.jp/21150.htm>)で公開されています。

● シンポジウム 「長良川のアユ」

白滝治郎さん、向井貴彦先生の講演に引き続き、粕谷志郎代表をコーディネーターに会場からの質問を中心に討論を行いました。

粕谷 お二人のお話について会場みなさんからたくさんの質問をいただいています。それを元にお二人から答えて頂きたいと思います。

まず、天然遡上ではない飛騨川流域のアユが長良川よりおいしいというのはなぜでしょうか。

白滝 感覚的な話として聞いてください。アユという魚は「氏より育ち」なんです。育った川のエサとなる藻類、川の石、藻類を育てるミネラルが違っているので味も変わってくるのだと思います。日本にはたくさんの川がありますが、全国それぞれの川がその地域の人にとっては日本一だろうと思います。(笑い)

向井 野生絶滅でも飛騨川のアユがおいしいというのはそれでいいと思います。米も元々は外来種だが、それぞれの地域で自分の地域のお米がおいしいと自慢することはあります。アユについて言えば、野生生物としてのアユと地域の特産物としてのアユは別のことだと思います。その川が昔ながらのアユの棲む川であるというのとは別のことです。

粕谷 アユについては養殖、放流、天然、半天然とかさまざまに言われているがその区別はどうしているのですか。

白滝 流通の中での話では、養殖、半天然は養殖として扱われています。天然というのは放流アユがある一定の期間川で育ったもの。ある一定の期間というのがどれくらいかは聞かないでください。水産研究所の技



術員に聞いた話では、大体2週間河川においておくことで天然のアユとさして大きな差異はなくなったということです。あまり大きなものを放流するのは良くないが、最大で10g位のものが40g、50gと大きくなった時には天然遡上のもとの遜色がなくなると思います。

粕谷 天然アユと天然遡上アユは違うということですね。昨年郡上の吉田川で、川の上から水面まで届く長いホースのようなものを見て何かと聞いたら、アユを放流するものだということでした。もし、放流してすぐその下流で釣った場合はどうなるのですか。

白滝 放流の時期は4月20日から5月20日頃です。小さいもので6g~7g。大きいもので10gです。アユの解禁は6月第1か第2日曜ですから早いものは2ヶ月、遅いものでも2週間という期間はクリアしていると思います。

粕谷 釣りのシーズンが始まってからは、放流はしないということですね。

白滝 はい、そうです。郡上鮎というブランドが大切ですので追加放流、二次放流ということは一切していません。

粕谷 放流量はどのくらいですか。

白滝 資料にもありますが、毎年16トンから17トン、1匹10gとして160万から170万匹という感触をもっています。

粕谷 河口堰との関係で質問がきています。7月から8月にかけて郡上でアユが群れをつくっているのも見かけるが、これは海から遡上してきたものだろうか。天然遡上のアユは縄張りをつくり友釣りに適しているということだが。

白滝 実際見ないと分らないが、サイズの小さいもの、10g以下のものは天然遡上かなと思います。たくさん遡上する時には群れることがあります。

粕谷 河口堰ができてから中流域で孵化したアユのこどもが海に下るのに随分時間がかかるようになっていきます。先ほどの向井先生の話では、長良川で生まれた仔魚が生き伸びることはほとんどないと考えていいのでしょうか。

向井 難しい質問ですが、10日をすぎた仔魚が塩分の高い海水にさらされると死亡率が高まるという生理的な実験と、以前より降下に時間がかかるようになって死亡率が高まっているというこれまでに得られたデータを合わせて考えると、ほとんど死んでしまうと考えられます。

粕谷 10日を過ぎてから海水に入れられるとほとんど生存できないということを知って驚きました。ところで、長良川には天然遡上アユはいるが、木曾川には天然遡上アユはいないというのはダムのあるなしなのでしょう。

向井 木曾川の下流にはいると思いますが、上流部には放流したアユしかいないと思います。

粕谷 本流にダムがないことがアユにとって大切だということですね。

向井 長良川で10月頃に産卵している天然遡上アユがいるとはいっても、昔に比べればかなり数が減っているのだと思います。そして、長良川に遡上するアユは、長良川以外にも揖斐川や他の伊勢湾流入河川で生まれたもの、長良川で漁協が孵化放流しているものなどが遡上していると考えられるので、仮に長良川で生まれたアユがほとんど生き残らなくても天然遡上は維持されます。しかし、それでいいのかというと、かなり疑問が残ります。長良川は河口堰さえなければ本当に良い環境の川だと思います。

粕谷 これ以上長良川の環境を悪化させないためにはどうすればいいと考えられますか。

向井 上流部の環境が悪くなっているということですが、僕自身は昔のことを知らないのですがそんなに悪くないように見えます。砂利が少なくなったと言われるが、理屈としてはその砂利は山から供給されなければ川に出てこないし、川の水が少なくなったと言われるが、森がしっかりとすると光合成で水が消費されて、むしろ供給が減るという研究もあります。

白滝 40年前と比べ、自宅前の長良川河床の洗掘が進んでいます。集中豪雨があると復旧工事で川が掘り起こされ川へのダメージは大きい。戦前は自宅の周りは8割が広葉樹で燃料に使っていたが今は2割もない。蒸発する量もあるでしょうが、森が雨を蓄え徐々に水を流してくれるようになって欲しいと思って森造りをやっています。

粕谷 世界農業遺産登録に「清流の国」というキャッチフレーズでしていますが河口を塞いだままで疑問はないのでしょうか。長良川は上流から下流まで一本の里川として登録すべきだと考えますが、というご意見がきています。

向井 岐阜県には他県に比べよい自然がたくさんある。海から上ってくる魚が少なくなっているという点ののぞけば良い川もたくさんある。単純な評価はしにくいですが、良い点はアピールして活かしていければと思う。

白滝 世界農業遺産については郡上の鮎を長良川全体に広げることが大切だと考えています。なぜ上・中流域だけなのかということは僕の手が及ぶところではないのでコメントは差し控えさせていただきます。もし農業遺産に指定されたら、もう一ひねりも二ひねりも考えてもらわなければならないと思います。産業、観光、色々な面があるが、最終的には「長良川のアユ」ということに繋げていきたいと考えています。

粕谷 世界農業遺産登録はいいことだと思うので、これを機会に河口堰開放に向けて天然アユが一杯上るようなもっと豊かな長良川にしていきたいと思います。

白滝 僕は他の誰よりもアユを愛していることをご理解いただきたいです。

粕谷 郡上漁協さんは河口堰はどう評価しておられますか。

白滝 現時点で、郡上漁協は河口堰の評価は正式には表明していません。

粕谷 河口堰の現状はそのままにして、より良いアユ、よりおいしいアユをたくさんということを目指しておられるということだと思います。サツキマスについての影響についてはいかがですか。

白滝 サツキマスの増殖は長良川漁協がアユと同じように河口に運んで放流する事業をやっています。サツキマスの漁獲ほど年変動の大きいものではありません。アユの解禁前の20日間ほどサツキマス釣りに専念しますが、多い年で10本前後、少ない年で2、3本です。下流のサツキマス漁師の大橋さんの所は漁場自体が消失していると僕は思っています。

粕谷 放流を含めてということですね。

白滝 放流と天然の区別は僕のレベルではできませんが、肉が赤いものは海まで行ったのだろうと思っています。

粕谷 サツキマスは遺伝的に下るものと下らないものがあるのですか。

白滝 以前、調査されたがよく分っていないようです。郡上でアマゴから銀毛化して下ったもののうち4%~5%が帰ってくると信じています。

向井 海と行き来する魚の中で、身体の高いサツキマスはまだ影響が少ない方だと思います。海に下るものとそうでないものが遺伝的に違うかどうかかわからないですね。

粕谷 長良川の「あゆパーク構想」について教えてください。

白滝 県と漁協が話し合っているところだと思います。場所は郡上市の白鳥町で、アユについての研究や伝統漁法の継承などの施設になると聞いています。

粕谷 農業遺産登録に合わせて、養殖アユをドンドン放流しようという計画が報道されましたがどんな影響があると考えられますか。

白滝 養殖アユと言われましたが、10g以下の放流アユは養殖という捉え方はしていません。放流アユの増殖ということで、センター施設の拡充ということだと思います。岐阜のセンターではまだ岐阜県全体の放流量を賄えていないのです。いい魚をちゃんと作ってもらうにはそれなりのキャパがいるんです、現状では足りないです。長良川に放流するアユは長良川で親を捕ってもらいたい。今年はそうしました。来年以降もそうなるために遡上時期にきた魚を捕って親にすることもしたいです。今、天然遡上アユが大体500万匹、放流アユが350万匹から400万匹くらい。長良川に1000万匹とはいわなくても800万匹から900万匹いると長良川は賑やかです。平成20年度はアユがたくさん来すぎて非常に小型化しました。河口堰でカウントして遡上アユが70万匹位だと実際は7倍位の490万匹から500万匹位になると思いますが、それに放流を同じ位するといいいのではと考えています。

向井 新聞記事を読んで、岐阜県は単純に放流アユを増やしたいのかなと解釈しましたが、琵琶湖産アユの放流を止めて、県内で作った県由来のアユだけで賄えるようにしたいということならそれはいいことだと思います。そのためにセンターを拡充するというなら大賛成です。ただし、単純に3倍放せば3倍釣れるようになるだろうということなら大間違いだと思います。

「内水面漁協は資源枯渇を避ける為に放流義務を法律によって義務付けられている」という白滝さんのお話を伺って、川の漁協が放流しなければならない理由がよく理解できました。しかしこの法律（内水面漁業の振興に関する法律）には「資源の増殖，養殖の推進と同時に，生態系その他の自然環境の保全，地域社会の維持，文化の伝承」なども謳われています。漁業者，釣り人，一般市民がそれぞれの立場を理解し，生物多様性に富む豊かな本来の河川にしたいという共通の目標実現を目指していきたいと思います。

(まとめ 長良川市民学習会・田中万寿)

2015.1/13 岐阜新聞

を大切にしているのは自然は「無くなる」と他の生物を含めた環境保全を訴えた。シンボは市民団体「長良川市民学習会」(代表・粕谷志郎岐阜大名誉教授)が主催。150人が熱心に聞き入った。



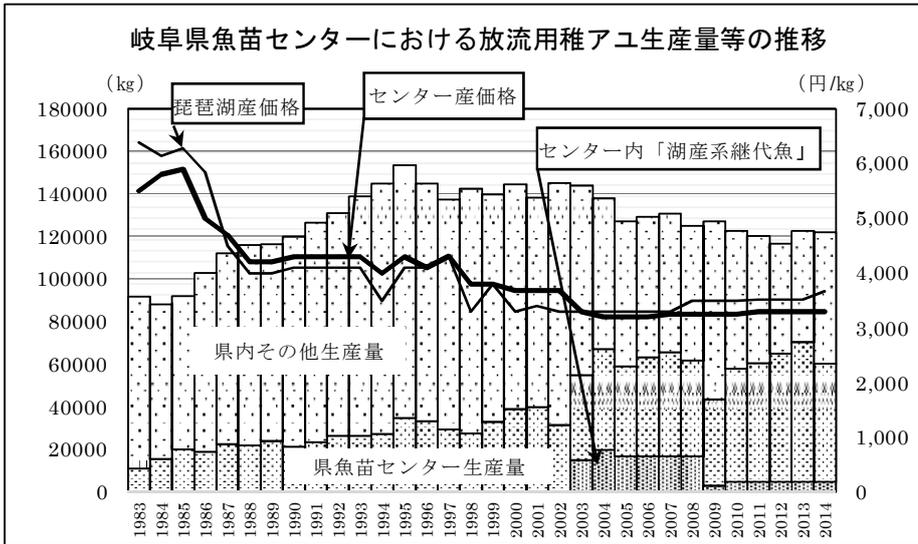
岐阜県魚苗センター見学会 報告

長良川市民学習会 堀 敏弘

4月16日(木)の岐阜県魚苗センター(関市と美濃市)見学会に参加しました。ここは岐阜県内の各河川に放流する稚アユを生産しているところです。私もアユ釣りをするので、ここで生産された稚アユがたくさん放流されていることは知っていましたが見学したのは初めてでした。現在長良川の鮎に関しては、2015年3月に鵜飼が国の重要無形民俗文化財に指定、さらに世界農業遺産の国内候補地の1つに長良川流域が選ばれ「清流長良川の鮎」をテーマに世界農業遺産登録のための活動が活発に行なわれています。また一方では長良川の鮎が岐阜市版レッドリストの「準絶滅危惧」の選定種となるなど何かと話題になっています。こうした中で県がアユの漁獲量日本一を目指し施設の拡充が計画されるなど、現在特に注目されている施設です。



見学にあたって最初に岐関大橋上流左岸堤防下にある関事業所で事業の概要説明を受けました。この



岐阜県魚苗センター資料をもとに作成 (武藤)

センターは昭和58年2月に岐阜県と岐阜県漁協が共同出資して設立した財団法人で、業務内容は「人工あゆ種苗生産供給事業」と「あゆ種苗生産技術研究」です。生産規模は関事業所25トン、美濃事業所26トン。あわせて年間51トンの放流種苗の生産目標。(実績はもっと多く26年度については60トンほど) 毎年県内河川放流量の50パーセント前後を生産し、26年度センター産種苗価格は1キロ当たり

り3300円、1匹10gで約30円となっています。

年間の生産過程は9月中旬からの餌のプランクトンの培養から始まり、10月初旬から11月上旬の木曾川の海産親アユから採精、採卵、人口精漿による精液希釈作業を経て受精。受精卵のシュロ着卵作業の後、受精後15日前後で孵化。10月～2月は小魚の世話。この時期は同じ日に孵化したアユも飼育していく間に成長に差が出てきてしまい、大小の差が広がると共食いを始めるので1月から2月にかけて大小の選別を行ないます。選別網にアユを入れゆっくりと揺らすと魚が動くことで一定の大きさ以下のものは網の目から出て分けられます。この作業を繰り返し、同じサイズの魚ごとに水槽に分けられ育成され4月から出荷となります。見学に行った日もちょうどトラックが来ていて出荷作業が行なわれていました。

この間、仔魚期は3%の人口海水で飼育、成長に合わせ淡水に切り替えます。餌も成長段階にあわせて2種類の動物プランクトン(シオミズツボワムシ、アルテミア)と配合飼料を与え、十分に成長したら配合

飼料のみの給餌に切り替えるそうです。また、給餌も人の手だけでなく自動給餌機も使われ、水温も加温設備により 14℃～17℃に管理、病気に対する防疫体制なども万全の注意が図られるなどすべてが徹底されています。

今回訪問しお話を聞いて初めてわかったのが、海産と湖産ということ。秋に木曾川の親アユから採卵、育苗したアユを海産系アユ、阿木川ダム湖産の親アユから育苗したアユが湖産系（12代目の継代）ということでした。一般的に釣り人の間では、海産アユは海から溯上してきたアユを指し、湖産は琵琶湖に注ぐ各河川で産卵、孵化したものが琵琶湖を海のかわりとして生活し育ったアユを指します。そしてこの魚苗センターで生産された人工アユの3種類のイメージがあります。しかし魚苗センター産のアユにも海産と湖産があったということです。なお商品としてのアユは海から遡上したものも稚魚放流されたものも川で漁獲されたものは天然アユであり、養殖アユは養殖場から直接出荷されたものの2種類です。こうして生産された稚魚は26年度のアユ種苗供給実績によると29漁協管内に放流され、県内のほとんどの河川に入っているようです。説明をされた船木事務局長も「このアユは日本一だ」と自負しておられました。育てたアユは自分の子どものように感じられるのでしょうか。

概要説明終了後施設の見学に入りましたが、建物の中には多くの飼育池が整然と並び、同じサイズの稚アユがそれぞれ飼育されていました。飼育池から魚を移動させる時にはホースを使い、見学時も2つの飼育池につながれたホースの中を稚アユが泳いで移動していました。飼育池だけでなく自動給餌機や水のろ過装置など様々な機械類を見せてもらうと徹底的に管理された工場といった印象でした。



なお今年の魚苗センター産アユ種苗は、昨秋の御嶽山噴火の影響で木曾川の産卵場の流れが白濁、木曾川漁協から仕入れていた親アユが例年の4割程しか確保できず、急遽長良川漁協に依頼し必要な親アユを確保したそうです。できれば今後も長良川産の親アユを使って生産していきたいと語っておられました。こうして生産されたアユの稚魚が長良川の鵜飼が始まる1ヶ月前頃に各河川に放流されるわけです。

いただいた資料で計算してみたところ26年度実績で長良川漁協、長良川中央漁協と郡上漁協管内で約31トン。板取川や津保川など支流を合わせると長良川水系で33.443トン放流されていました。（木曾長良下流を除く）1トンあたり約10万匹とのことでしたので約334万匹となります。

これだけたくさん放流してやっと長良川のアユが維持されているのですね。「長良川にはアユがいる」にはこの魚苗センターの方々の研究と努力があるのです。

もしアユ資源確保のためのこの仕事や、以前見学させていただいた長良川漁協が秋に行なっている河口堰右岸の人工河川を使った9000万粒の孵化事業という人間の手が加わらなかつたら、長良川のアユはいったいどうなってしまうのでしょうか。魚苗センター産放流アユでもなく、孵化事業で海に下り川に戻ってきたアユでもない、秋に川で孵化し海に行き戻ってきた本当の野生生物としてのアユはどれだけのいるのでしょうか。想像するだけでも恐ろしく、「長良川のアユ」が準絶滅危惧の選定種になったのもわかります。

こう考えると河口堰を閉めたまま、長良川やアユを「世界遺産に！」と訴えるのは何か違うような気がします。やはり河口堰を開け森と川と海のつながりを取り戻し、世界遺産にふさわしい川にしてから、思い切り「世界遺産に！」と世界に自慢して叫びたいものです。

これが見学を終えた後、私が最初に考えたことでした。

ご期待ください！7/4-5「よみがえれ長良川」

1995年7月6日長良川河口堰のゲートが閉鎖されました。今年、長良川は河口堰運用20年目を迎えるようとしています。

私たちはこれまで流域の市民団体と「市民による豊かな海づくり大会実行委員会」「よみがえれ長良川、よみがえれ伊勢湾実行委員会」「長良川・伊勢湾・COP12アクション」などの活動を積み重ねながら「よみがえれ長良川！」をスローガンに河口堰の開門を訴え続けてまいりました。

河口堰事業の最大のステークホルダーといえる愛知県は検証作業を進め、国に対し合同会議を開くことを提案したが、国は後ろ向きで開催の目途は全くたっていません。

長良川が貫く地元岐阜県では、今年3月に「長良川の鵜飼漁の技術」が国の重要無形民俗文化財となり、さらに世界農業遺産認定「清流長良川の鮎 ～里川における人と鮎のつながり～」にも期待が広がっています。しかし、長良川のアユは河口堰の障害で人の手を借りないでは生息が維持できない状況があり、岐阜市は長良川のアユを「準絶滅危惧種」としました。また、河口堰による環境悪化のもと岐阜県の世界農業遺産登録申請は下流域を外さざるを得ないにもかかわらず、県は「塩害の恐れ」を理由に河口堰開門に背を向けています。

私たちは清流長良川を次世代に渡すためにも、本当に世界に誇れる清流とするためにも、山から海までの繋がりを取り戻したいと願っています。ゲートが閉ざされ20年を迎えようとする今年こそ、これまでの河口堰賛成・反対の立場や経緯を乗り越えて、「塩害の懸念」にも対応して稲作が終わった秋、長良川で生まれたアユの仔魚が海に降りていけるように「開門調査」を実現し、本格的な河口堰開門に向けた元年にしたいと思っています。

本年3月9日、当会代表粕谷志郎とNPO法人藤前干潟を守る会理事長亀井浩次氏の呼びかけで、4月9日「よみがえれ長良川実行委員会」を立ち上げました。実行委員会は、国や岐阜県に開門調査実現に向けた要請行動を行うとともに、ゲートが閉じられた7月6日に因んで、7月4日（土）に河口堰周辺の環境を見る観察会とアピール行動を行います。7月5日（日）には長良川国際会議場で午前長良川河口堰建設反対運動を「知らない」世代が参加するトークを企画、午後のシンポジウムでは日本で初めてのダム撤去で川と海がよみがえっている話をつる詳子さん（球磨川・荒瀬ダム）から、川を守り導水路建設とたたかう漁協・市民の話を浜田篤信さん（那珂川・霞ヶ浦導水路）から聞いて「河口堰の開門調査実現を！」を考えます。全国の長良川を愛する皆さんの期待に応える内容を工夫・検討し準備を進めているところです。

是非7月4日（土）、5日（日）長良川に来てください。お待ちしております。

なお、よみがえれ長良川実行委員会の岐阜県要請行動は知事あてに下記の要請事項を掲げ6月10日（水）午前10時45分より県庁において行います。ぜひご参加ください。

記

1. 世界農業遺産に相応しい長良川とするために、岐阜県としても是非、長良川河口堰の開門調査実現に取り組んで下さい。

具体的な時期や調査内容などは、漁業関係者や研究者、環境団体関係者、法律家などを委員とする透明性・

公開性のある委員会を設置し、広汎な市民の意見が反映できるようにして下さい。

2. 木曾川水系連絡導水路事業は、現在、凍結され、国土交通省中部整備局等で検証中です。岐阜県は環境分野でさまざまな懸念を示し、国に回答を求めてきていますが、いまだに十分に納得できる回答はありません。この際、岐阜県にとっては要らない施設であるということをお明らかにして下さい。

3. 長良川をこれ以上人工構造物によって悪化させてはなりません。内ヶ谷ダムについては工事の中断も検討して下さい。洪水防御に関しては、里川の考えにのっとり、流域治水の考え方を採り入れ、伝統的防災施設を活かす方向で、流域住民と十分に話し合ってください。

以上。

訃報

この半年の間に長良川市民学習会を応援していただいていた大切な方々の訃報が相次ぎました。

水崎節文さんは河口堰が問題になった今から40年ほど前、1974年に岐阜市で生まれた市民グループ「長良川河口ぜきに反対する市民の会」の設立時に代表をつとめられました。当時岐阜大学の政治学が専門の助教授でした。漁協の裁判を支え、市民学校を開催したり、署名集め、県交渉、川まつりの「どてこん」というイベントなど多彩な運動をしましたが、漁協裁判の取下げなどで1987年に活動を停止しました。月刊の「川吠え」という機関誌も160号で休刊。その直後に本体工事が始まりました。

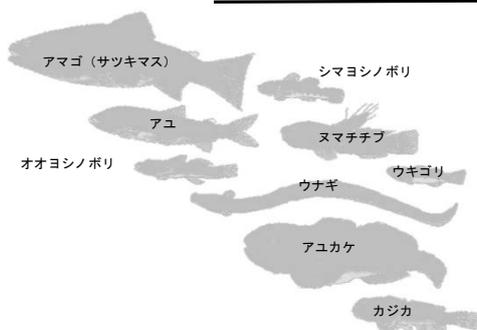
笠木透さんは次ページ校歌に歌われた長良川の稿をご覧ください。

小島力さんはなんとしても愛する長良川を蘇らせたいという思いで「長良川おんぱく」などで積極的な取り組みをされました。当会の催しにも「韓国4大河川事業視察と交流ツアー」などに積極的に参加されました。長良川とアユのことは何でも全身全霊を注いで調査し、人に伝えようとする姿が印象的でした。



韓国の河川事業を視察する小島さん（左から4人目）
2012/6/20 ナムハンガン・イボ堰にて

表紙の絵



後藤宮子さんの描いた回遊魚が源流から伊勢湾まで、自由に行き来できるオープンな川に戻したい、という願いをこめています。山頂は大日ヶ岳のシルエットを形どっています。「長良川→長い良い川」「良い川＝魚が生きる川」という意味から長良川の象徴アユを「良」の文字の中に入れ、「魚に障害のない、ひとつにつながる長良川によみがえらせた」という願いをタイトルロゴにも込めています。
(デザインを担当した高橋由実さんの言葉より)



長良川

作詞／笠木透
作曲／坂庭賢草

日本海を渡る 人たちの目しるし
そびえたつ山 白い白山
雪どけ水が 清水となつて
生まれたばかりの 川は流れる

* 山から海へ 緑をはこび
海から山へ 魚はのぼる
とうとうと とうとうと
流れる 長良川
このままで このままで
流れよ 長良川

谷間の町だよ 郡上八幡
赤いちようちん 盆おどり
町のざわめきを ぬうように
水の音がする 川は流れる

* くりかえし
空が広いね 濃尾平野
水にとびこむ 黒い子どもたち
堤防を走る ランナーの姿
日ざしをあびて 川は流れる
* くりかえし

太平洋を およぎまわり
母なる川に 帰ってきた
サツキマスよ 銀色の光
水鳥の声 川は流れる
* くりかえし

えほん「長良川」の後ろ ステージ中央で歌う笠木透さん

(2009年6月7日「中日新聞」切り抜き)



えほん長良川

長良川市民学習会を応援してくださっていた笠木透さんが亡くなられました。昨年末のことです。笠木さんは日本初の野外フェスタ、中津川での「全国フォークジャンボリー」を企画運営され、マスメディアに頼らない活動をされてきたフォークシンガーでした。

長良川市民学習会では、2009年トーク&コンサート「笠木透と雑花塾」を開催しましたが、この歌を笠木さんのリードで河口堰反対を戦った世代、河口堰を知らない若い世代と、13メートルの長い絵本を掲げたステージ上の子供たちが一緒に歌いました。世代を超えた川への想いが結晶したかのような感動的な熱い舞台が思い出されます。

生きている魚たちが生きて泳ぎまわる川を
あなたに残しておいて やれるだろうか 父さんは 「私の子どもたちへ」 作詞・笠木透
この歌詞をいつも自分に問いかけながら
とうとうと とうとうと 流れる長良川
このままで このままで 流れよ長良川
と心から願います。ありがとうございました 笠木透さん。安らかにお休みください。(岡久米子)

ご参加ください

- 6月2日(火) 導水路裁判控訴審 第4回 名古屋高裁 午前11時～
- 6月10日(水) 岐阜県知事への要請行動 午前10時30分 県庁2階ロビー集合
- 7月4日(土) 長良川河口堰20年/環境観察会
- 7月5日(日) よみがえれ長良川 トーク&シンポジウム

* 今回、7月4日・5日のイベントを案内するリーフレットを同封いたしました。所属される団体・グループ、お友達などへの配布にご協力いただける方はお知らせください。お届けします。

発行：長良川市民学習会

<http://dousui.org/>

代 表：粕谷志郎

連絡先：武藤 仁／090-1284-1298

〒500-8211 岐阜市日野東 7-11-1

● 私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。賛同くださる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：00840-3-158403

口座名称：長良川市民学習会